

大公孫樹

イチョウ

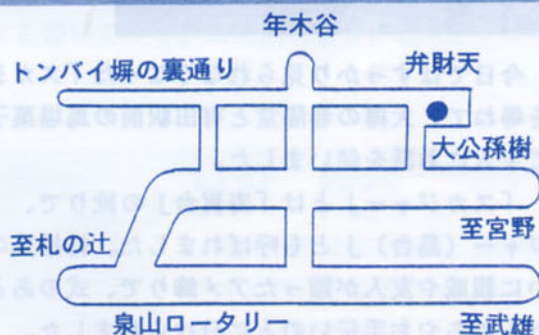
公孫樹は中国原産の落葉高木で、日本では古くから神社や寺院などの境内に植えられてきました。また、最近では街路樹としても広く植えられるようになってきました。

泉山の弁財天社の境内には、大正15年10月20日国産の天然記念物に指定された大きな公孫樹の木があります。推定樹齢は1,000年、根回り12.5m、幹回り9.5m、樹高40mにもおよぶ堂々たる風情は見る者を圧倒します。毎年秋になると、見事に紅葉し、周辺の家並みから美しい頭をのぞかせます。落葉すると、その量はトラック数台分にもものぼり、近所の方の手間をとらせてしまいます。

以前、有田においでになった樹医の山野忠彦先生は、「この公孫樹の木には、赤ちゃんをもったお母さんが祈ると母乳をだす力を秘めている」とおっしゃいました。

1828年の文政の大火の時、この公孫樹の木に隣接し難を免れた池田家では、「公孫樹の木は火を嫌い大火の時に風をおこして火を寄せつけず、家を守ってくれた」と言い伝えられています。

1,000年前といえば、平安時代。この公孫樹の木はそのころの有田から知っています。もの言わぬ生き証人、これからも、温かく有田の町を見守ってくれるでしょう。



皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報

No.11

皿山の風物



写真は昭和3年ごろの「有田ぐんち」

有田ぐんち

関東北部から信州にかけては、おくにち（御九日）は9月9日、またはその日に行われる氏神の祭りのことを言い、本来、秋の収穫を祝うものでした。九州各地でも「おくんち」（御供日）が秋になるとありますが、語源の由来は9月9日でしょう。

有田で「くんち」と言えば陶山神社の秋祭りです。江戸時代、八幡宮とか宗廟八幡宮と呼ばれていた陶山神社は今も「八幡さん」として親しまれています。天保3年（1832）に書かれた正司考祺の「儉法富強録」によれば、期間は「九日（くにち）ト名ケハハ

月十五日ヨリ始り九月九日（中略）十月二及」んだとあります。また20年以前は「肴二、三種二致シ至テ儉約ナル処近年ニ至テハ町村互ヒニ競ヒ花麗ニ及」んだと年々ぜいたくになっていったことを伝えています。

明治に入ってから「競ヒ」は続きます。町内の各区が持ち回りで神事区に当たっていましたが、神事区に当たった当番区は、神事に奉仕した記念の品となるものを神社に奉納していました。明治13年（1880）には岩谷川内区から青銅の馬が奉獻され、14年には泉山区から御影石の灯籠と手水鉢、15年には上幸平区から青銅の灯籠、16年には中樽区から灯籠、17年には大樽区から青銅の鳥居と灯籠、18年には青銅の獅子が奉獻されています。いずれも莫大な出費でした。そのほか、神事区は「道踊り」の衣装、余興の費用などもかさみまし、神事区以外の家でも酒食のもてなしに多額の支出に悩まされました。生活に心のゆとりをもたせるための祭りが、かえって生活を圧迫するようになりました。

そして、昭和31年の町区改正から全町的な秋祭りを求める機運のもとで、昭和34年、従来のお供日を廃止し、産業祭として全町をあげての秋祭りとなり、今に至っています。

なかなか学ぶところの多い「くんち」の歴史ではないでしょうか。



皿山の味

スカジャー 「寿賀台」

今日ではすっかり見られなくなった「スカジャー」を尋ねて、大樽の春陽堂と有田駅前の馬場菓子舗のご主人にお話を伺いました。

「スカジャー」とは「寿賀台」の訛りで、「シマジャー（島台）」とも呼ばれました。結婚式のお祝いに親戚や友人が贈ったアメ飾りで、式のあとは子どもたちやお手伝いの人に分けられました。

スカジャーは、水と砂糖を煮詰めてアメを作り、空気を折り込みながら練って作り、空気が混ざり白くなったアメを、型に押しあて形をとり、絵を付けたり、はりあわせたりして作りあげていきます。あ

るいは、団子状にまるめて、吹き竹で吹いて形を作り、専用の定規で細工を施したりもします。食紅などで色をつけるので、本物そっくりの美しい養老の瀧や翁や媪、鯉の滝上りや宝船などが出来上がります。アメがすぐに固まらないように、鉄板の上で、上から炭火をつるして温めながら作っていたそうです。

現在のように、空調設備が整っていなかった昔の結婚式は、たいてい10月から陶器市のころまでに行われていました。この時期になると、職人さんとはとても忙しかったそうです。戦前はこの家庭でも、結婚式の日になると「スカジャー」が飾られていたのですが、太平洋戦争を境に、原料である砂糖が手に入りづらくなったこともあって、ほとんど姿を消してしまいました。

「スカジャー」とは違うものですが、似たものとして「千代結」があります。これだけは現在も結婚式の引き出物に添え続けられています。

写真は昭和40年ごろの結婚式。花嫁さんの裏にあるのが寿賀台
(写真提供は、大樽・織田秀昭さん)



私と有田焼

徳見知孝先生の思い出〔下〕

長崎県立猶興館高等学校教諭 白石純英

昭和29年4月29日、有田陶磁美術館が佐賀県第1号の博物館として登録されました。同時に徳見知孝さんに副館長として、45年まで勤めていただきました。

町内外の人たちから「徳見先生」と慕われていた人でした。



私は昭和38年（大学4年）夏、卒業論文の資料収集のため再び陶磁美術館を訪れた。徳見先生は相変わらず背を丸めて、調べ物をせせとノートに書いておられた。私は陶磁器の関係者や研究者を紹介してもらったり、ゆかりの史跡を案内していただいたりした。それは、微に入り細に入った案内であり、初心者の私は綿が水を吸い込むように良く理解できた。特に今右衛門窯への紹介はありがたかった。資料室での勉強や、現在の今右衛門さんからの直接の指導は忘れることは出来ない。このように、卒業論文は徳見先生はじめ諸々の人たちのご指導のたまもので、写真集を添えてなんとか完成することができた。

昭和39年5月の有田陶器市から徳見先生が宮崎へ転宅されるまで、陶磁美術館へ用事があるがなかり暇を見ては行き、観覧者へ案内役を買ってでた。それは、少しでも手助けになればということと、先生からいろいろと教えてもらいたかったからである。

この陶磁美術館では良く勉強させてもらった。徳見先生を訪ねて来られる人たちから耳学問をした。先生は「陶磁器の勉強はなんと言っても陶片を良く観察することだ」と言って、真夏の石倉で発掘された陶片の整理をさせられた。額に汗の玉を作りながら、俵に詰め込んである陶片の古窯跡別の整理は、きついながらも大変に勉強になり今でも大いに役立つ



陶彫赤絵の狛犬。有田陶磁美術館所蔵。もとは泉山の弁財天社に奉納されていました。染付有田職人尽絵図大皿と並んで県の重要文化財に指定されています。

っている。

この年、県教育委員会による民俗資料緊急調査があり、先生と共に有田の民俗調査を行った（佐賀県の民俗 昭和40年12月）。真夏の太陽が照りつける中、先生をバイクの後に乗せ、後から指示されるままあちこち回った。私は主に、写真撮影と関係者からの聞き取り調査を担当したが非常に楽しかった。長崎県の者が調査員ではまずかろうということで、地元の者にされた裏話もある。今でも愉快でうれしい。その思い出多い陶磁美術館も足が遠のいて多くの歳月が経っている。

先生の晩年の姿を「反骨の陶芸家佩山」（西日本新聞社昭和56年）の著者山本康雄氏は、その中で『宮崎市の宮崎温泉病院に入院している一人息子の徳見知孝（八十八歳）は、松本勝治、のちの佩山と有田工業学校で同級。知孝はすっかり腰が曲がり、目をしょぼつかせ、あえぎ、あえぎ、記憶をたどった。』と書いている。師恩忘れまじ。合掌。



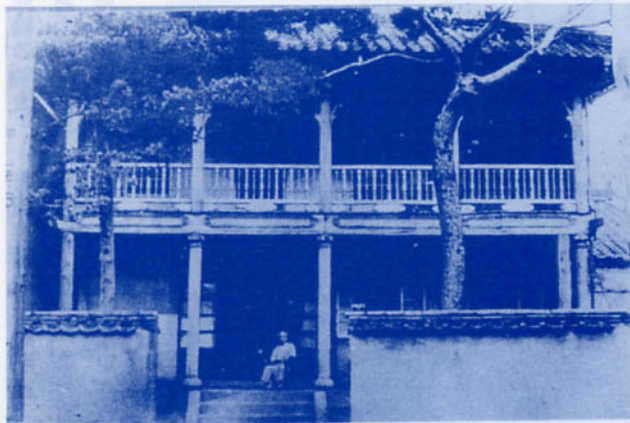
白石 純英

しらいし・すみひで

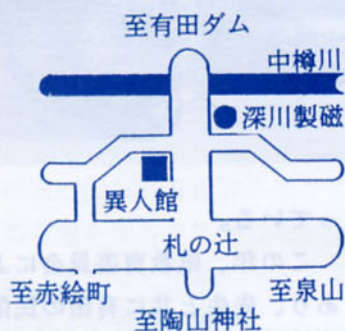
昭和16年に生まれる。国学院大学史学科を卒業後、長崎県立猶興館高校に勤務。「波佐見町史上巻」を分担執筆し、平戸中野焼など三川内焼の研究を続けている。東洋陶磁学会・日本陶磁器協会会員。

街角の歴史

大正時代の異人館



異人館



札の辻の交差点を白川の方へ曲がると、すぐ左手にまわりの建物とは少し違った人目をひく洋館があります。西洋風の建築様式を取り入れた和洋折衷の建物で、有田の人は「異人館」と呼んでいます。

嘉永六年（1853）、アメリカのペリーが浦賀に、ロシアのプーチャーチンが長崎に入港し、幕府に通商を要求しました。そして翌年の安政元年（1854）に、日米和親条約・日露和親条約・日英和親条約が締結され、さらに安政五年（1858）には、日米通商条約が締結されました。続いて「安政の仮条約」が、ロシア・オランダ・イギリス・フランスと結ばれ、これによってオランダによる海外貿易の独占は終りを告げました。

これに伴って、有田焼の輸出制限も緩和され、田代紋左衛門も新たに貿易商として免許を受けました。その子助作が明治九年（1876）に、有田の陶磁器を輸入する外国商人の接待、宿泊所として建てたのがこの「異人館」です。木造二階建てで、二階正面にはベランダがつき、屋根は寄棟造、棧瓦葺です。一階は板張りが主で、一部畳敷、二階は畳敷で床の間と違棚がつき、一階と二階はらせん階段でつながれています。

明治九年当時の有田の先進性を物語るものであり、また数少ない明治時代の洋風建築物としてとても貴重なもので、県の重要文化財に指定されています。

街角の歴史

新しく「今右衛門文庫」

平成元年に国重要無形文化財の指定を受けた今泉今右衛門氏より、その指定を記念して多額の寄附金をいただきました。

資料館では寄附者の意思を尊重した上で、下記のものを購入し、文化財保護の充実を図りました。

- ・マイクロフィルムカメラとプリンター
- ・ビデオ機材一式
- ・歴史・民俗・考古学・陶磁器関係書籍 415冊

特に書籍に関しては「今右衛門文庫」として一般の方々が自由に見ることができるようになっています。御希望の方は資料館までお申し出ください。（ただし、貸し出しはできません。）



専門書をそろえた今右衛門文庫

白川の細流(せせらぎ)

有田町歴史民俗資料館に勤めるようになって、早くも3カ月が過ぎました。当初は、右も左も分からず、オロオロする毎日でしたが、少しずつ慣れてきて以前はどうもたえなくなりました。何となく様子が分かってきて、さあ、これからです。お話を伺いにお邪魔したときには、どうかいろいろ教えてください。（萬）

有田町歴史民俗資料館報 No.11

発行年月日 * 平成2年9月1日

編集・発行 * 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地
☎0955-43-2678